

大阪の公立高校X校には、家庭環境的にも学力的にも「厳しい」層が集まりがちである。そこには教師や他の生徒から「ヤンチャな子ら」と呼ばれる男子生徒たちがいる。彼らは「現代版のヤンキー」ともいえる存在であり、そう呼ばれるのは「ケンカや喫煙、教師への反抗などの「ヤンチャ」な行動を繰り返すから」だという。本書は、若い社会学者がそうした高校生たちの中に入り、長きにわたって観察やインタビューを続けた成果である。

少し前ならば、関西では「ヤン」という呼称もあったと思うが、今ならやはり「ヤンチャな子」となるのだろう。またヤンキーという語は、マーケティングや文化批評の文脈でも用いられるようになっており、高校生たちが口にするには、ややよそよそしい言葉となっているのかもしれない。

## 〈ヤンチャな子ら〉のエスノグラフィー

知念 渉著

# 長く観察し多様性明らかに

これまでこうした若者たちは、**真犯や非行、不良少年として問題化されたり、経済的なアンダークラス(出身)、非正規雇用(予備軍)、教育現場では低学力層、な**いしいわゆるスクールカーストにおける上位層などととらえられてきた。見る視点や角度によっていかようにも語りうる彼らであるが、本書はあくまでも当事者その

これを直視し、一面的な見方を避けている。そしてヤンチャな子一人ひとりが、社会において、学校において、文化的な環境において、さまざま要因によって重層的に規定された、多様な存在であることを明らかにしている。

では、多様なヤンチャな子が、なぜ「ヤンチャな子ら」と集合的に語られるようになるのであろうか。学校空間において「よくつるんでい」る」ことに加え、おとなしい、彼らからすればイケてない生徒たちである「インキャラ」との対照において、彼らが自らを「ヤンチャな子ら」と定義している点も見逃せない。オタク的とされる趣味に没頭しがちな、陰気なキャラクター」とは違つ、派手で強めな自分たちを誇示しているのである。

〈ヤンチャな子ら〉の  
エスノグラフィー  
ヤンキーの  
生活世界を  
描き出す 知念 渉



(青弓社・2400円)  
ちねん・あゆむ 85年沖  
縄県生まれ。神田外語大講  
師。専攻は教育社会学、家  
族社会学。共訳書に「文化  
・階級・卓越化」。

こうしたヤンチャな子らも、卒業ないし中退後は比較的安定した進路をたどることもあれば、より不安定な経路を歩む者もいる。その差は、なぜか。一概に答えの問題ではないが、本書からは多くのヒントを見出しうるだろう。

〔評〕関西学院大学教授

難波 功士